読解と解説

市河寛齋の詠んだ富山 (三)

磯部祐子

富山大学人文科学研究第81号抜刷
2024年8月

読解と解説

市河寛齋の詠んだ富山　㈢

磯部祐子

八、親しい人々

寛政三年に富山に出仕して致仕までの二十年間、寛齋は江戸と富山を五度往復するが、富山で詠んだ詩は少なくはない。寛斎の目に映った富山はどのように描かれたか。小論では、富山で親しくした人々との交流に視点を置いて論じたい。

なお、用いる底本は、「文政四年　江戸浅草茅町二町目　須原屋伊八」[一]の出版になる『寛齋先生遺藁』である。

(1) 家老・村隼人との交わり

富山における寛齋の詩の中で、最も多く詠われる人物は「邨大夫」、すなわち、富山藩御年寄（家老）村隼人である。村隼人は、石高三千石[二]、藩では最も力のあった家老の一人であり、『富山藩士由緒書』[三]の家名「村左兵衛」の項には、寛政頃に家老の任にあった「村

一　『詩集　日本漢詩　第八巻』、汲古書院、昭和六十年。
二　当時の藩士名や役職などを記す史料である「安永九年分限帳」（富山県立図書館蔵）には「御年寄村隼人一胤三千石」とある。
三　新田二郎編、（『越中資料集成2』）、桂書房、昭和六十年。

隼人」として、「村隼人一胤」「村隼人一張」[四]の二人が記されている。「村隼人」の「隼人」は、本来官名の隼人正であったが、後に武家では号のように用いられていた。

村隼人　一胤

右、宝暦七年、霑慈院様御代、父遺知三千石被下置、　御家老職被　仰付置候、寛政十一年十月、隠居被　仰付、名善兵衛与相改…

文化十一年二月十五日、病死仕候

村隼人　一張

右、寛政四年、　寛隆院様御代、為御鼻紙代弐百俵被下置、御家老職御雇被　仰付、同十一年、父隼人知行三千石被下置、御家老職被　仰付置候　文化元年、　霊昭院様御代　不軽過失二付禁足隠居被　仰付、下屋鋪二慎罷在候、文化十四年、禁足　御免被仰付、名圖書与相改。

文政十年四月廿五日病死仕候

この記述から、寛齋が富山に赴任した寛政三年当時、家老であった「村大夫」とは、宝暦七年から寛政十一年の隠居まで家老職を務めた「村隼人　一胤」であり、赴任の翌寛政四年には、その息子の「村隼人　一張」が「御家老職御雇」（ご家老の見習いのことか）となり、父の一胤が隠居した寛政十一年から正式な「御家老職」に就いたことが分かる。なお、当時の富山城下図からは、村隼人の住居は、重臣の屋敷が置かれていた城内の丸の内にあったことが窺える。寛齋の宿舎が藩校近辺にあったとすれば、寛齋は村家まではそう遠くはないところに住んでいたことになる。

村家との親密な交際ぶりは、身内に宛てた手紙からも窺える。例えば、同行して来越していた寛齋の息子の三亥が、その祖母（すなわち寛齋の母）に（寛政五年八月）宛てた手紙には、「夜中村圖書（村隼人一胤の息子一張のこと）殿、富田頼母殿なそ相呼れ種々の

四　上掲『越中資料集成1』の「富山藩侍帳安永九年（一七八〇）」の項にも「御年寄村隼人一胤三千石」とある。

料理御馳走罷成候。」[五]と村家に招かれて料理を振舞ってもらったことが記されている。

富山に赴任してまもなくであろうか、寛齋が村大夫の招きを受けたことが、次の二首に詠まれている。

① 邨大夫見邀（邨大夫に邀えらる）

其の一

秋宵詩酒討幽期　秋宵詩酒　幽期を討め
欲把高齋擬習池　高齋を把りて　習池に擬せんと欲す
最是大夫多野意　最も是れ　大夫　野意　多し
後園霜熟剥蹲鴟　後園　霜熟し　蹲鴟を剥く

【現代語訳】

秋の宵、詩を作って酒を飲む約束をした。手に器をもって（山簡が酒を楽しんだ土地である）習池の様子をまねてみた。村様は最も野趣に富む。中庭に霜がすっかり降り立った中で、（村様は）里芋の皮を剥かれた。

【解説】

「詩酒」は、詩を作ることと酒を楽しむことをいい、文人の楽しみであった。例えば、宋代の陸游はそのことを「詩酒平生楽、無如老病侵（詩酒は平生の楽しみにして、老病の侵す如きは無し）」[六]や「我生寓詩酒、本以全吾真（我が生は詩酒に寓り、本以て吾が真を全せんとす）」[七]等と詠んでいる。

「習池に擬せんと欲す」は晋の竹林の七賢の一人である山濤の子の山簡とかかわりがある言葉である。山簡は、無類の酒好きだった

五　市河三陽著『復刻市河寛齋先生』（あかぎ出版、平成四年）一四五頁。
六　『劒南詩稿』巻五十九「詩酒」。
七　『劒南詩稿』巻八十「詩酒」。

ようで、「簡、優游すること卒歳[八]、唯だ酒のみ是れ耽る。諸の習氏、荊土の豪族にして、佳き園池有り。簡、毎に出でて嬉遊し、多く池上に之き、置酒すれば輒ち醉い、之を名づけて高陽池と曰う」[九]と記されている。簡は永嘉三年（三〇九年）に西晋に仕え、刺史に任命されて襄陽に赴いたが、一年中のんびりと遊び、ただ酒に耽る毎日だった。諸というところの習氏は、荊州の豪族で、家には大きな園池があった。簡はいつも、習家の池に行って酒があれば飲んで酔い、その池を高陽池と呼んだという。寛齋は、この故事を借り、村家老とともに酒を楽しむ交流の様を「習池に擬せんと欲す」と表現したのである。

「多野意」は、野趣に富むこと、また、洒脱豪放で些事にこだわらないこと。寛齋が村家老を「多野意」と評することから、両者は相当に打ち解けた仲であったことが窺える。

「高盦」の「盦」は、黍等の穀物を盛る祭器。「蹲鴟」は、さといものこと。

其の二

孤負東籬賞歳華　東籬にて　歳華を賞することに　孤負し
秋將盡夜在天涯　秋の將に盡きんとする夜　天涯に在り
非君詩酒相邀切　君が　詩酒もて　相邀えるの切に非ざれば
那向瓶中見菊花　那ぞ　瓶中に向かいて　菊花を見ん

【現代語訳】

（江戸の自宅の）東の垣根で花（菊）を愛でることをせず、秋も終わろうとする夜、（私は）天の果て（富山）にいる。あなたが詩酒でねんごろに私を招いて下さらなければ、どうして酒瓶（壺）に浮かぶ菊を見たりなどしましょうか[一〇]。

八　「優游以卒歳」は、悠々と過ごして一年を送ること。
九　『晋書』列伝第十三巻「山濤（子簡・簡子遐）」。
一〇　本一首は、蔡毅・西岡淳『日本漢詩人選集9　市河寛斎』（研文出版、二〇〇七）八十二頁にも現代語訳及び解説がある。

【解説】

二首目には、秋も終わろうとする夜に、菊を愛でる寛齋が描かれる。この詩で言わんとすることは、江戸を離れて孤独な自分をねんごろに招いてくれた（「相邀えるの切に」）村家老への感謝である。

「孤負」は、そむくこと。「東籬」は、屋敷の東側の垣根、ここでは、江戸の自宅の垣根を指す。「東籬」は、結句の「菊」を導き出すための一語といえる。陶潜（淵明）の「飲酒」二十首の其五に「採菊東籬下（菊を採る　東籬の下）」とあることを踏まえた表現と思われる。「瓶中」は、酒瓶（壺）の中を指す。「瓶中に向かいて菊花を見ん」は、やはり、「飲酒」其七に、「秋菊有佳色、裛露掇其英。汎此忘憂物、遠我遺世情（秋菊　佳色あり　露を裛（つつ）みて其の英を採り　此の忘憂の物に汎（うか）べて　我が世を遺（わす）るるの情を遠くす）」を踏まえたもので、菊の花を酒（忘憂の物）に浮かべて見ることをいう。

寛政四年、『寛齋先生遺藁』巻一、二七三頁。

この翌年の春にも二人の交流の軌跡は記される。秋の菊花から、冬を経ていつしか初春の梅花へと変わったものの、いずれも花を愛でる行為が描かれている。

②　春夜邨大夫席上看盆梅（春の夜　村大夫の席上にて盆梅を看る）

夜賞盆梅花未残　　夜　盆梅を賞（め）ず　花　未だ残（そこな）われず
交枝紅白巧堪寒　　枝を交（か）わし　紅白　巧みに寒さに堪ゆ
忙中但恐孤芳事　　忙中　但だ恐る　芳事に孤（そむ）くことを
更挑青燈子細看　　更に　青燈を挑（かか）げて　子細に看る

【現代語訳】

村家を訪れた夜に、邸の盆栽の梅の花を愛でると、まだ枯れていない。梅は枝を交差させて紅白が巧みに入交（いりまじ）り寒さに耐えている。忙しさの中で、美しい花に背かないようにと、読書用の灯火の灯心を更に掻き立ててじっくりと見た。

【解説】

漢詩の中で、「夜の梅」は、王安石「梅花」の句「為有暗香来」[一一]のように、ほのかな香りが詠まれることが多い。しかし、この一首は、盆梅全体、なかでも、一つの幹から咲く紅白の梅花が枝を絡み合わせている姿が詠まれている。その姿を「巧みに寒さに堪ゆ」と表現したのは、一人異郷にいることの寂しさが背景にあったからであろうか。

「残」は、そこなうこと。「孤」は、前出の「孤負」と同じ意味でそむくこと。「芳事」は、花が咲いている状態を指す。「芳事」を用いた詩として、元代の黄庚に、「芳事闌珊三月時、春愁惟有落花知（美しい花が散り乱れる三月の時、春の憂いは落花のみが知る）」[一二]の句がある。

寛政四年、『寛齋先生遺藁』巻一、二七六頁。

③　夏日過邨大夫林亭（夏日　邨大夫の林亭を過る）

斜日蟬聲碧樹陰　斜日　蟬聲　碧樹の陰
炎蒸洗盡稱煩襟　炎蒸　洗盡して　煩襟に稱う
清涼一段添成趣　清涼一段　添えて　趣を成す
氷裂紋寒古漆琴　氷裂の紋寒き　古漆の琴

【現代語訳】

日が傾いて蝉の声がする緑樹の木陰は、暑さを取り去ってくれて、胸のつかえにちょうどよい。この清涼に趣を添えているのは、氷の裂けた模様の寒々とした古い漆琴である。

一一　宋代王安石『臨川文集』巻二十六「梅花」。
一二　元代黄庚『月屋漫稿』「暮春」。

【解説】

富山での初めての夏。寛齋は、高木が鬱蒼と茂る村家老の邸宅を訪れた。村家には、古い漆塗りの琴があって、夏の夕暮れ時には、家族の誰かが美しい音色を奏でていたのかもしれない。それは、暑さを忘れさせてくれるような氷の裂け目がついた模様の琴であった。「煩襟」とは、苦しみ悩む胸の内。この一語は、元代湯舜民の散曲[一三]「謁金門　納涼寓意」[一四]に「翠林、緑陰、喜把紅塵禁。炎蒸従此去煩襟、毛骨如冰沁（翠の林、緑の陰、世間のわずらわしさを避けられるのがうれしい。暑さもこれで憂いを取り去り、身体も氷のように冷たくなった。）」に見えることばである。鬱蒼とした木陰（「碧樹陰」）は暑さも取り去ることができ（「炎蒸洗盡」）、苦しみ悩む心にはふさわしい（「稱煩襟」）ということ。また、ひび割れ模様の古琴の描写は、清涼さの描写とともに村家の家風や歴史を賛美したもの。なお、中国では、琴にひび割れがあるのは五百年ほど経たもの（「古琴以断紋為証、琴不歴五百歳不断」）[一五]であるとされる。

この年は、一度江戸にもどり、六月五日ごろ再び（二回目）来越した。長男三亥を連れての勤務であった。

寛政五年、『寛齋先生遺藁』巻二、二七九頁。

④　郊行和邨大夫韻（郊行し邨大夫の韻に和す）

秋郊一路覓詩初　秋郊一路　詩を覓（もと）めるの初め
瘦柳衰楓興不虚　瘦柳衰楓　興　虚しからず
最愛江頭人少處　最も愛す　江頭　人　少なき處
清沙水浅見遊魚　清沙水浅くして　遊魚を見る

一三　端唄や小唄に相当する曲。既成のメロディがあり、それに合わせて作る。
一四　隋樹森編『全元散曲』（中華書局、一九九一）一五九五頁。
一五　『四庫全書』収録、宋・趙希鵠撰『洞天清録』「古琴辨断紋」。

【現代語訳】

秋の日、郊外に詩作に出かけはじめたころ、痩せた柳や散りゆく楓に心惹かれた。しかし、河のほとりの、人気が少ないところが最も好きだ。（そこで）水が清く澄み浅瀬で泳ぐ魚を見るのだ。

【解説】

秋の日、郊外の河畔を散策したのであろう。それは神通川の河畔か、或いは、神通川に流れ込む鼬川の辺りか。その浅瀬の河水は、澄んでいて魚が泳いでいるのもはっきりと見て取れた。

寛齋が好んで読んだ陸游詩の中に、「水清沙淨見遊魚、槐柳陰陰五月初」[一六]という句がある。この陸游詩は、陸游の故郷・西村を尋ねた際に詠んだもので、季節は五月。詩には、故郷ならではの解放感、小さきものへの愛情が窺える。翻って、寛齋詩は九月に異郷にて詠んだものである。川添いの人の往来が少ないところの澄んだ浅瀬で自由にのびのびと泳ぐ魚が目に入った。寛齋は、異郷にいることを忘れさせてくれる自然がここにはある、と述べたかったのかもしれない。

寛政五年、『寛齋先生遺藁』巻二、二八〇頁。

⑤　冬初過邨家二首（冬の初め　村家を過る二首）

其の一

雪雲風捲霽寒霄　雪雲　風に捲かれて　寒霄に　霽る
詩未成間酒半消　詩　未だ成らざる間に　酒　半ば消す
但有邨翁能好客　但だ　邨翁の　能く　客を好む有りて
地爐手折積柴燒　地爐に　手で　積柴を折りて　燒く

一六　『劒南詩稿』巻五十一「游西村贈隠者」。

【現代語訳】

雪雲が風に巻きあげられて、寒い夜空は晴れわたり、詩はまだ出来上がっていないのに、酒は半ばなくなってしまった。しかし、村様はホスピタリティに富む方だから、囲炉裏に薪を手ずから折って燃やしている（燗酒を用意してくれている）。

【解説】

雪が降るような空模様であったが、一陣の風が吹き、冷たい空気に空は晴れた。その日、寛齋と村家老らは、酒を飲みながら詩作の会（いわゆる「詩酒」）を催していたのである。燗酒は飲み切った。すると、ホスピタリティに富む家老は、炉に薪をくべて、燗の準備をしたのである。

「寒霄（かんしょう）に　霽（は）る」は、「寒い夜に晴れる」の意で、杜甫「閣夜」[一七]詩に、「歳暮陰陽催短景、天涯霜雪霽寒宵（年の暮れになり、陰陽二気は、昼間を短くするようにせきたて、故郷から遠い天の涯のような地の霜や雪は、寒い夜になって晴れた）。」と見える。杜甫「閣夜」は、歳暮に異郷にて詠んだ詩であり全体に寂寥感が漂う。一方、寛齋詩には、起句・承句にこそ杜甫詩にみる寂しさはあるものの、転句では、村家老の客好きな人柄によって心安らいださまが詠まれている。

「地爐」は、「囲炉裏」と解釈したが、寛齋詩には「手爐」（文化二年）と題する詩もあり、その前年に亡くなった母からプレゼントされた「手爐」すなわち「火鉢」を詠んだものである。「三冬取友幾年年、吟臥牀頭籠煖烟。最是寒宵伴愁處、越山風雪夢醒邊（冬の三か月、友としても幾年もたつ。寝そべって詩を詠む布団の傍らで温かい煙を漂わす。特に、寒く鬱々とした折、越中の山から吹き来る風雪に目が覚めた時。）」[一八]とあり、「爐」一字がつく「地爐」「手爐」両語は共に、体を温めるのみならず、「友」のように、心を温めるものとして描かれている。

一七　『九家集注杜詩』巻三十一。
一八　文化二年、『寛齋先生遺藁』巻三、二九六頁。

其の二

南山昨夜一聲雷　南山　昨夜　一聲の雷
淡日風収雪欲催　淡日　風収まり　雪　催さんと欲す
應惜人来破幽趣　應に惜しむべし　人の来りて　幽趣を破るを
成堆落葉護蒼苔　堆を成す落葉　蒼苔を護る

【現代語訳】

南のほうの山で、昨夜、雷が鳴った。薄日の中、風も収まり雪が今にも降りそうだ。ただ、誰かがやって来て静かな風情を壊すのは残念だ。積まれた落ち葉が青い苔を護っているのに。

【解説】

漢代の楽府「上邪」は、天変地異でも起こらない限りあなたとは別れない、という強い感情を表出した詩として知られているが、その原文は「山に陵無く、江水為に竭き、冬雷震震として、夏に雪雨り、天地合して、乃ち敢て君と絶たん（山に丘がなくなり、川に水がなくなり、冬に雷が鳴り響き、夏に雪が降って、天地が合わさるほどのときが来たら別れよう）」とある。「冬に雷が鳴り響き、夏に雪が降ること」などあり得ないという前提に立っての表現である。

しかし、寛齋詩の「一聲雷」は、冬の雷ではあるものの、天変地異ではない。越中では、冬雷は南からきて、それが鳴ると日本海を回遊しているブリが獲れ始めることから、冬の雷を「ぶり起こし」とも言い、今日でも富山の冬の風物詩である。

起句、承句は、雷の後に、静けさの中で、雪模様に移行する日本海の冬の気候を描き、転句で、誰かがやってきてその静寂な風情を破ることを残念だといい、結句で、落ち葉が苔を守り自然が静かに守られていて趣に富むのにと結び、人の足でそれが踏みにじられるのが残念だと眼前の風情をいつくしんでいる。或いは、「人来りて」の「人」は寛齋のことを指し、その訪問によって、村大夫の「幽趣」ある生活を邪魔してしまったことへの詫びと温かい接待を受けたことへの感謝の気持ちをユーモラスに表したのかもしれない。

寛政六年、『寛齋先生遺藁』巻二、二八〇頁。

(2) 秀才・國寶との交わり

「國寶」とは、前稿に記したように、後に広徳館の祭酒になる大野拙齋（一七七二～一八三〇）の字であり、『続近世百傑傳』[一九]には「大野拙齋」の項目があり、「拙齋、名は鼎、字は國寶、通稱十郎、本姓は紀、拙齋はその別號なり。」とある。拙齋は、幼少時から優れた才能（「幼くして敏悟凡児に異なり」）を見せたようで、人々は僧や医者にしようとしたものの本人は好まなかった。しかし、その後、「典奥」すなわち学問の奥義には強い関心を示し、それを究めていったようである。「書を妙傳寺に讀む、人事を却掃して典奥を鑽尋す、是に於てか學日に益す進む、一時の耆宿皆遠到を期す。富山の家老某殊に其才を愛し、厚餽以て學費を資く。上毛の河子静、藩の辟に應じて至るや、一ひ見て遽稱して曰、是國の寶なり。因て以て字とす。」とあるように、妙傳寺[二〇]で学問を修め、寛齋（河子静）もその才を高く評価して、「國寶」と呼んだ。もちろん、「國」とは「越中の国」という意味である。富山の「家老某」もその才能を高く買ったとあるが、家老某とは、前述の村家老であり、学費を援助したのである。

また、京に上って学んでくるように勧めると、京では一流の学者と行き来した。脚気を患い一度は帰越したものの、再度、京に上って、当時一流の禅僧かつ漢詩人である大典顕常に教えを乞うた。大典は、最初はおごり高ぶるさま（「簡亢」）で拙齋を拒否したものの、幾度も頼んだ結果、受け入れてくれた。拙齋があまり根を詰めて学ぶことから、大典がその理由を聞くと、「昔、自分は夭折と占われたことがあったが、この世に生まれたからには名を残さないわけにはいかない」と答えて熱心に学んだ。刻苦勉励の後、その甲斐あって、拙齋の学問は、大典に「経書の解釈は自分と合致する。ともに語り合おう」とまで言わせることになる。以上について、前掲書は次のように記している。

之を慫慂して上國に學はしむ、乃ち京に遊び搢紳文儒の間に往来す。交はる所みな當時の名流、たま〳〵脚疾を得て國に還る。後

一九　干河岸貫一編（博文館、明治三十四年刊）一〇六～一一一頁。『近世百傑傳』は、本編と続編から成るが、併せて近世の名士二百人が集録されている。干河岸は「拙齋先生大野君墓碣銘」（釋玉潤）に基づいて記したと思われる。なお、「拙齋先生大野君墓碣銘」（釋玉潤）は、『近世名家碑文集』（明治二十六年、經濟雑誌社）に収められている。

二〇　妙傳寺は、当時、今日の山王町日枝神社東隣にあったが、明治三年に、廃仏稀釈による合寺令により梅沢町に移転した。

再遊し名刺を脩して大典禪師に謁す。簡亢猥りに容接せず、三たび往て乃ち見え、留めて側に侍せしむ。夙夜矻々刻意力學す。大典疾を得るを恐れ、時に之を慰諭す。拙齋曰、昔し鼎を相する者あり。壯に及んで死せんと。自ら顧ふに君子世を没て名稱せざるを疾む、是刻苦自ら勵む所以なりと。師曰、汝志確く氣旺りなり。吾汝か決して夭折せざるを保せんと。拙齋經を執て質問反復す。大典曰、鼎が經義を論ずる、我意に闇合す。鼎や與に經を言ふべし、と。

その人となりは「至孝」「忠信篤孝」「平居端然寡言」「物欲に淡し」とあり、学問については、飢えや乾きを貪欲に癒やすように学んだと記されている（「其學を好むに至りては、猶飢渇の飲食に於けるか如し、ゆえに學通ぜざる所なくして造詣亦深かりしといふ。」）。文化九年（一七九七）には昌平黌に入ったが、「学識は卓異、ひそかに敬服せざるものなし」と伝わっている。二十八歳[二一]（一八〇〇年）の時、富山藩の儒員となり、後、文政二年（一八一九）には、富山藩における儒者としての最高の地位ともいえる広徳館の祭酒の任に着き、文政十三年に五九歳にて死去した。

ところで、大野拙齋は、『続近世百傑傳』のほか、『続先哲百家傳』[二二]にも紹介されている。先哲は儒者のこと、その儒者としての生涯から見れば『続先哲百家傳』に収められるのは頷けるが、「百傑」に入ったのはなぜか。『続近世百傑傳』の作者の干河岸貫一は、その序文で、取り上げる人物は「勤勉、忍耐、忠孝、節烈等後進ノ亀鑑トスルニ足ルベキモノアル」を主とする言い、各伝記の末尾に、記述者自身の論評を加えている。論評は、「櫻所子曰（櫻所子が曰う）」として書かれているが、「櫻所子」は干河岸貫一の号であり、この形式は、『史記』において司馬遷が自らを「太史公」と称し、「太史公曰（太史公が曰う）」の形式で論評を加えたことを真似たものである。拙齋についての論評は以下のようである。

櫻所子曰、封建の昔時　農工商估敢て士林に齒するを得ず。故に其教育を受くるも亦士大夫の子弟と共にする能ず。農商の子にし

二一　碑文には二十八歳とあり、百傑伝には二十二歳とあるが、二十八歳が正しい。

二二　干河岸貫一著（青木嵩山堂、明治四十三年刊）。「先哲」には、皆川淇園、市河寛斎、市河米葺などの儒学を学んだ人々が選ばれているが、「百傑」には、例えば、上記三人のうち皆川淇園は含まれるものの、他の二人は含まれていない。しかし、滑稽本の式亭三馬、戯作者で浮世絵師の山東京伝、蘭方医の杉田玄白など多彩な人々が選ばれている。

て文才あるものも、戯作者たり俳人たるに止るもの多し。其儒を以て諸侯に聘せらるゝに至るもの甚だ稀なり。拙齋賣藥家の季子にして、其領主たる富山侯の祭酒となるに至る。門地を以て官禄を世襲したるの往時にありては、拙齋の如き亦非常の榮達を學業に依て得たるものなり。家を富さんには良田を買ふことを用ひず、書中自ら千鍾の粟ありといふもの二三、亦古人の我を欺かざるを知るに足れり。

ここからは、拙齋が『続近世百傑傳』に選ばれた理由が、士大夫（儒者）の子弟や武士の家柄ではなく「農工商估」出身でありながら、学問によって栄達し藩の祭酒にまでなったからであることが読み取れる。

以下に、寛齋が拙齋（國寶）のことを記した詩を取り上げる。

① 訪國寶　時寓居妙傳寺（國寶を訪う　時に妙傳寺に寓居す）

金天雨淡法堂雲　　金天　雨淡し　法堂の雲
窓暗沈爐晩氣薰　　窓暗くして　沈爐に　晩氣　薫す
砌下虫聲秋更静　　砌下の蟲聲　秋　更に静かなり
借床欲向夜深聞　　床を借りて　夜の深きに向かいて　聞かんと欲す

【現代語訳】

秋空の下、雨も止むころ、法堂の上に雲がかかる。窓は暗く、沈香の炉に夕がたの気配が漂う。石階段の下から虫の声がして、（耳を澄ませば）秋は一層静寂さを増す。一宿して、夜の深まりの中で、その声に耳を澄まそう。

【解説】

この詩は、寛政六年（一七九四）に作られた。一方、拙齋が広徳館に招請されたのは寛政十二年（一八〇〇）であり、この詩が作ら

二三　『古文真宝』「真宗皇帝勧学文」に、「富家不用買良田、書中自有千鍾粟（家を富ますに良田を買うを用いず、書中自ら千鍾の粟有り）」とある。

れた時期（寛政六年ごろ）は、拙齋は京都に遊学していたと思われる。京都から富山に戻ってくると、かつて学んだ妙伝（傳）寺に寄宿することがあったのだろう。そこに寛齋も足を運び、語り合ってそのまま一宿することになったのかもしれない。この一首からは、才ある後輩との再会に、満ち足りた様子で、ゆったりと季節の移ろいを感じているさまが伝わる。『孟子』に、君子の「三楽（三つの楽しみ）」の一つとして、「得天下英才、而教育之、三楽也。（天下の英才を得て、之を教育するは、三楽なり。）」とある。天下の優れた人物を教育するのは、人生の楽しみの三つのうちの一つである、というのである。直接、寛齋が学舎で教育したかどうかはさておき、國寶と呼び、その才能を高く評価した人物との交流の喜びが伝わる。

「妙傳寺」は、市内にあって、寛齋の住居からも遠くなかったところと思われる。富山藩における藩主の菩提寺は、日蓮宗大法寺と曹洞宗光厳寺であるが、「妙傳寺」も藩主の援助を受けていたと推測される。『加越能寺社由来上』[二四]には、日蓮宗の寺院である、と記される。現在の住職の話によれば、江戸時代には、日枝神社の東南隣にあったが、明治初期の廃仏稀釈で梅沢町に移転したとのことである。その後、富山大空襲で被災したのか、現在、江戸時代の様子が分かるものは何も残っていないという。ちなみに、今日では、長谷川等伯の描いた鬼子母神像がある寺院として知られる。

「金天」は、五行で秋は金に属すことから、秋空のこと。「砌下」は、石階段の下を指す。

寛政六年、『寛齋先生遺藁』巻二、二八〇頁。

②　題畫示國寶（畫に題して國寶に示す）

西風揺落客衣単　　西風　揺落す　客衣の単
山骨臞来水脉乾　　山骨　臞（やせ）来て　水脉　乾く
想得神通川上路　　想い得たり　神通川上の路（みち）

二四　日本海文化叢書　第一巻（金沢大学法文学部内日本海文化研究室編、井上鋭夫校訂、石川県図書館協会出版、昭和四十九年）九十六頁。

与君尋句歩秋寒　　君と　句を尋ねて　秋寒に歩くを

【現代語訳】

（絵は）西から吹く風が旅人の薄い衣を揺らし、山は痩せて水脈は絶えている。（それを見ていると）あなたと詩を求めて、秋寒の中、神通川沿いの道を歩いたことを思い出した。

【解説】

絵画に添えた絶句一首である。絵には西風に吹かれた単衣を来た一人の旅人が見える。遠方には冬を待つ単色の峰々、近くには水の枯れた川が描かれている。それは、拙齋（國寶）と二人で、詩作のため川べりを散策したことを思い起こさせる一幅であった。越中において、ともに詩作した人物は何人ぐらいいたのであろうか。拙齋はそのうちの一人で、かつ特別な存在であったのかもしれない。

「客衣」は旅衣、「単」は一重のこと、「客衣単」で旅人の薄い着物を指し、秋冬に着る袷（裏地をつけて仕立てた着物）とは異なる。「山骨」は、絵画において山を指すときに用いる。山景を背にした旅人を描いた宋画を目の前において記した一首であろうか。

寛政六年、『寛齋先生遺藁』巻二、二八七頁。

次の詩は、『寛齋先生遺藁』には収められていないが、『市河寛齋先生』[二五]に「紀遊の詩十七首を留む。温泉は八尾村の西南の下之名[ママ]村の渓側より出づ。先生滞在の間に大野拙齋の訪問あり。」として収録されている寛齋詩の一首である。詩題は記されていない。

③　無題

渓風暁冷報牢晴　　渓風　暁冷たく　牢晴を報ず
正好人来弄水聲　　正に好し　人来たれば　水聲を弄す
試了爐茶無一事　　爐茶を試し了えて　一事とて無く

二五　一二三頁。

膽瓶又汲急湍烹　　膽瓶（たんへい）もて　又た急湍（きゅうたん）に汲みて　烹る

【現代語訳】

河の風が暁に冷えて、収穫の秋晴れを告げている。ちょうど訪問者がいたので水音を楽しみ（渓流の水を汲み）、囲炉裏で茶を味わい終えると他にすることはない。（そこで）細い頸の瓶で　また早瀬で水を汲んで沸かした。

【解説】

「暁冷たく　牢晴を報ず」とあるように、朝に冷えると日中は晴れ渡ることが多い、いわば放射冷却現象である。そんな日、訪問者があったので茶を飲もうと渓流で水を汲み、湯を沸かし、茶を入れて一緒に飲み、それを終えるとすることがなくなった。そこで、もう一杯茶を飲もうと首の長い瓶を持ってまた水を汲んで沸かす。この詩は、起句にその日の気候を詠み、あとは水を汲んでお茶を入れ、また水を汲むという自分の様子を描くだけの一首である。しかし、その描写からは客人（拙齋すなわち國寶）の到来を喜ぶ気持ちが読み取れる。客人は、寛齋が下の茗温泉に行ったときに訪れたとすると、享和二年（一八〇二）の事になる。

下の茗温泉は、今は廃れてないが、もとは山間の渓流の岸辺にあった。今日では、八尾の中心部から県道二三〇号線を走り行くと、下の茗に近づくにつれて、点在していた家々もほぼなくなっていくが、江戸当時は、藩主も訪れたというから、温泉宿舎もあり、城下の人々の一定の往来もあったのだろう。

「牢晴」は、「きりりとした空気感ある晴天」を指し、南宋の楊萬里「十月久雨妨農收、二十八日得霜、遂晴、喜而賦之」に、「風收白痴霧、霜作上牢晴。（風が白い霧を払い、ついに霜が降り収穫にふさわしい晴れの天気をもたらす）」[二六]と見える。

「試茶」は、茶を味わうことをいう。

なお、寛齋が高く評価した拙齋の人となりの高潔や学問への純粋な姿勢は、拙齋自身が記した以下の二首からも窺える。

二六　『誠齋集』巻四十一。

① **竹下雙鶴**二七　　**大野拙齋**

萬里煙霄縱意騫　萬里の煙霄　意を縱に　騫ぶ
有時息翼緑雲屯　時有り　翼を息ませ　緑雲に　屯す
野鶩家鶏非我伍　野鶩　家鶏　我が伍に非ず
虚心高節此君存　虚心　高節　此君　存す

【現代語訳】

（鶴は）はるか遠くの大空をほしいままに飛び、時おり翼を休ませ緑雲に集まり憩う。アヒルや鶏などとは連まない、虚心高節の竹のように。

② **石山月**　　**大野拙齋**

五十四篇傳至今　五十四篇　傳わりて今に至る
揮毫遺跡石山陰　遺跡に揮毫す　石山の陰
千秋無恙湖天月　千秋　恙が無し　湖天の月
曾照當年女史心　曾て照らす　當年　女史の心

【現代語訳】

源氏物語五十四帖は今に伝わる。私は、（紫式部が源氏物語を記した石山寺の）遺跡に揮毫した、石山の陰で。千年も変わらぬ琵琶湖上の月。かつて、当時の紫式部の心を照らしたことだろう。

二七　『越中古今詩鈔』（亀谷龍二・橘有隣編、光奎社、一九二六）五頁。

ところで、前稿の「乙卯二月廿二日與君壽克卿國寶及児亥同遊蟹江早發」において、「國寶（拙齋）」のほか「君壽」「克卿」と一緒に、寛齋が蟹江（海老江）に遊んだことが記されていた。寛齋と君壽・克卿・國寶は同遊するなど親しい関係であったと推測されるが、君壽・克卿・國寶間の関係も極めて良好であったと思われる。例えば、拙齋と君壽（高田姓であろう。）の交友については、拙齋の『清儉堂遺稿 一』所収「與高田君壽」（京都にいる拙齋が君壽に宛てた手紙）[二八]に、「拙詩一首録上（私めの詩を一首記します）」と見えることからも窺える。拙齋と君壽との間で、詩のやり取りが行われていたのである。

なお、高田君壽とは、年代および職務から推して、『富山藩士由緒書』に見える「高田右門　芳昌」[二九]を指すと思われる。そこには、

高田右門　芳昌

寛隆院様御代、寛政四年、御近習転役被　仰付、其後、寛政九年、御書物預り被　仰付候　享和元年、御勤方分限帳帰役被　仰付、翌二年、　霊昭院様御代、廣徳館教授被　仰付候、　文化十三年、病死仕候

とあり、「御近習」、「御書物預り」、「廣徳館教授」と、主君の側に仕え、書籍や記録の管理、そして学問教授の役割を担った人物であったと思われる。

（3）学問に一途な野崎克卿へ

「君壽・克卿・國寶」は年齢の順序に記したのであろうか。実際、克卿は、一七五七年の生まれで、一七七二年生まれの國寶より十五歳年上である。克卿とは、國寶同様にその字（あざな）であり、名は雅明である。雅明は、享和二年（一八〇二）から藩校広徳館の監生（教授）を勤めることになるものの、詩作時の寛政九年（一七九七）時点では、まだ広徳館の助教であった[三〇]。

二八　大野拙齋『清儉堂遺稿 一』（写本）（国会図書館所蔵）。
二九　二六二頁。
三〇　寛斎は一七四九年生まれで、この時、広徳館の祭酒、すなわち富山藩の学問において最高の地位にあった。

雅明は、享保十六年に、祖父の伝助（号は蘇金）が越中に関する歴史上の出来事を『喚起泉達録』[三二]としてまとめたが、後に散逸したため、祖父の功績を引き継ごうと、新たに文化十二年に『肯搆泉達録』[三三]として再編して上梓した人物である。藩儒の岡田英之による『肯搆泉達録』序文には、「久しくして、其の書　散逸し、幾ど半ばす。克卿、之を憂え、乃ち博く群志を捜り、勤めて旧聞を求め、輯録して以って編を成す。（しばらくして、その本が散逸して、半分ほどになった。克卿は、そのことを残念に思い、さまざまな地方の資料を探し、また言い伝えを聞き求め、それらを集めて記録し一冊にまとめた。）」とある。実際、『肯搆泉達録』からは、豊富な知識、強い使命感、学問への情熱が窺える。文化二年（一八〇五）、九代藩主利幹のとき、「学問多年心掛け厚く出情」により、「与外組格」を仰せ付けられた、という。

『富山藩士由緒書』「五一〇　野崎伊太夫」の項[三三]には、「雅明」について、以下のように記されている。

一　祖父　　野崎伊太夫　雅明

寛隆院様御代、寛政五年六月四日、広徳館助教被　仰付、同六年八月五日、父三左衛門隠居被　仰付、御徒組被　召出、父御擬作之通被下置、御書出ヲ以是迄之通広徳館助教可相勤旨被　仰出候。

霊昭院様御代、享和二年六月廿一日、監生被　仰付候、其後、監生名目学正ニ御改、則学正相勤申候、同享和四年、当御代御部屋御住居之節御附被　仰付、同年五月、江戸詰仕、文化二年五月、　霊昭院様御帰城之節御供ニ而帰着仕、同年十一月廿日、広徳館学正被　仰付候　同年十二月廿二日、学問多年心掛厚出情ニ付御組替、与外組格被　仰付候　　同文化十三年十月廿五日、病死仕候。

寛隆院（前田利謙）の時代である寛政五年（一七九三）六月四日に富山藩校・広徳館の助教に命じられた。父の隠居の後は、御徒組を命じられたが、広徳館の助教もこれまで通り務めるようにとのことで、享和二年（一八〇二）六月には、助教から監生（後に名称は学正）になった。その後、江戸詰を経て、文化二年に帰越して再び広徳館の学正になり、同時に長年学問に心を傾けて取り組んだこと

三一　京田良志編、桂書房、二〇〇三年。
三二　野崎雅明著、KNB興産（株）出版、昭和四十九年。
三三　新田二郎編『越中資料集成2　富山藩士由緒書』（桂書房、昭和六十三年）九三三～九三四頁。

が認められ、与外組格（特別職）に命ぜられた。

寛齋は、その学問に熱心であった克卿に次のような詩を贈った。

①　贈野崎克卿（野崎克卿に贈る）

如眠如醒費推敲　　眠るが如く醒めるが如く　推敲を費やす
生計多般箇裏抛　　生計　多般　箇の裏に　抛つ
要識吟翁得意處　　吟翁　得意の處を識らんと要ば
尋梅半酔歩春郊　　梅を尋ねて　半酔して　春郊を歩まん

【現代語訳】

（君は）夢うつつの中で詩語の推敲に打ち込み、生活のあれこれはこんなふうにして放り出した。詩を嗜む翁（私）の得意とするところを知りたいなら、梅を探してほろ酔機嫌で春の野を歩こう。

【解説】

雅明は、詩文の創作にきわめて熱心であったと推測できる。それ故に、当時、いわば上司であった寛齋は、そんなに根を詰めずに肩の力を抜いて酒を楽しみ散策でもしてみなさい、とアドバイスしたのかもしれない。

承句の「生計多般箇裏抛（生計　多般に箇の裏に　抛つ）」の「生計抛」の語は、白楽天の「送蕭処士游黔南（蕭処士の黔南に游ぶを送る）」[三四]に「生計抛來詩是業、家園忘却酒爲鄉。（生計抛ち来りて詩は是れ業。家園忘却して酒を鄉と爲す。）」と見える。白楽天と寛齋の両詩は、詩句のみならず、詩酒（詩作と飲酒）を楽しむ詩境も同じである。

「生計」は生活のこと、「多般」は多種多様の意味。「尋梅」は、春先に、梅の芳香や春の息吹を求めることをいう。

三四　『白氏長慶集』巻十八。

寛政九年、『寛齋先生遺藁』巻二、二八四頁。

なお、野崎雅明自身の詩は、『越中古今詩鈔』[三五]に以下の二首が収録されている。

① 梅柳渡江春（梅柳　江を渡るの春）　野崎雅明

嶽雪猶餘一帶銀　嶽雪　猶お餘る　一帶の銀
春來北地未知春　春來たるも　北地は未だ春を知らず
東風界斷江南景　東風　界斷す　江南の景
柳態梅粧各自新　柳態梅粧　各自　新たなり

【現代語訳】

山の雪はまだ残っており、一面銀色に輝いている。春が来ても、北の地（富山）ではまだ春の訪れが感じられない。東風が江南の景色と一線を画しているのだ。（それでも）柳と梅はそれぞれ新たな姿を見せ始めた。

【解説】

遠く立山の白銀の世界に春まだきの感を抱いていたが、いつしか東風が吹き、緑と紅の彩りが添えられていく。越中の美しい自然の循環を洗練された易しい漢語で記した一首といえる。

② 美人睡起（美人睡起）　野崎雅明

鴛鴦繡帶綺羅衫　鴛鴦の繡帶　綺羅の衫
弱骨豊肌又不凡　弱骨　豊肌　又た凡ならず
睡起慵粧何處比　睡起　慵き粧い　何處に比せん
海棠一朶始開緘　海棠一朶　始めて開緘す

三五　『越中古今詩鈔』（亀谷龍二・橘有隣編、光奎社、一九二六年）十二―十三頁。

【現代語訳】

オシドリの模様の帯と美しい綾衣の着物、なよかで艶のある（美人の）肌はとりわけ美しい。眠りから覚めて物憂げに化粧するさまを何に喩えようか。まるで海棠の花がほころびはじめたかのようだ。

【解説】

「美人睡起」の題は、美人が目覚めたばかりのさまをいう。元代の詩人・楊維楨（一二九六～一三七〇）は、前漢の成帝の皇后となり寵愛を競った趙飛燕と趙昭儀姉妹のうち、趙昭儀を描いた「昭陽曲」詩の中で、「美人初睡起、内史報蘭湯（美人が眠りから覚めたばかり、宮中の役人が蘭花の湯の準備ができたことを知らせる）」（『鉄崖先生古樂府』巻九）と眠りから覚めた様子を記す。また、美人の肉体を形容する「弱骨豊肌」は、なよなよして豊満な姿をいうが、やはり趙昭儀を形容する文章の中で、「趙后體輕腰弱、善行歩進退。女弟昭儀不能及也。但昭儀弱骨豊肌、尤工笑語。（趙飛燕は軽い身体と柔らかい腰つきで、舞うように歩くことが得意だった。その妹の趙昭儀はそれに及ばなかったものの、柔らかく豊かな身体で、笑い方が魅力的だった）」（『西京雑記』巻一）[三六]と記している。

寝起きの美人が化粧するさまについては、「傾国名姝…還是睡起慵粧（傾国の美女は…やはり寝起きに物憂げに化粧するときが美しい）」[三七]と記され、その姿は海棠の花に比せられることもあり、宋の釋惠洪には、「上皇笑曰、豈是妃子醉真海棠睡未足耳。（皇帝は笑いながら「楊貴妃が酔った姿は海棠の花がまだ眠り足らないようだなあ」とおっしゃった。）」[三八]という一文がある。

雅明は、趙昭儀といい、楊貴妃といい、スレンダーよりグラマラスな美女を彷彿させる語彙を用いている。しかし、美女のなまめかしさを描いてはいるものの、典拠のある正統派の言葉で記されていることによって、かえって、雅明のまじめな人柄を窺うことができる。

三六　『西京雑記』は、前漢の出来事に関する逸話集である。
三七　宋・方千里『和清真詞』「玲瓏四犯」に見える。
三八　『冷齋夜話』巻一「詩出本處」。

（4）親しく交流した野上家の人々

①　過野上習之宅（野上習之の宅を過る）

一路沙平倚杖行　一路　沙平にして　杖に倚りて行く
茅茨日暖午鶏鳴　茅茨　日は暖かにして　午鶏　鳴く
短蘺壊處梅花出　短蘺の壊るる處　梅花　出づ
待得遊人已有情　遊人を待ち得て　已に情有り

【現代語訳】

砂の道はどこまでも平らで、杖をつきながら歩く。チガヤとイバラに春の日差しが暖かく注ぎ、午後の鶏が鳴いた。低い垣根の壊れたところから梅の花が顔を出し、待ちに待った客人が来たので喜んでいるようだ。

【解説】

この詩は、寛齋が生前に出版した『寛齋百絶』にも、「過来学宅」[三九]として収められている。『寛齋百絶』の出版には、寛齋自身の意向も反映されていたであろうから、寛齋にとって得意の作であったのかもしれない。

「過」は「よぎる」と読み、「立ち寄ること」。このたびの訪問は、どこかに出かけるついでの行為であったのかもしれない。野上家は、現在の射水市海老江の海岸にほど近いところに今もある。寛齋は、神通川を越えて海沿いの街道を歩いてきた。その家は、「茅茨」とあることから、この当時は、茅葺屋根だったと思われる。二人の交流は、お互い心許すものだったのだろう。「遊人を待ち得て　已に情有り」は、野上家当主が自分の到来を待っていてくれたことを梅に託して表現していると解釈できる。言葉を補って詩を解釈すると次のようになるだろう。「海岸に沿って、杖を供に長い道を歩いてきた。茅葺の家には初春の日差しが暖かく降り注ぎ、主人は、鶏の

三九　『寛斎百絶』（寛政九年）十四頁。

一声で昼寝から目を覚ましたようだ。ふと見ると、壊れた垣根のところから梅の花が顔を出している。それはまるで私が来るのを待っていたかのような風情であった。」

この詩の中の語彙と同じ語彙を用いて作られた詩が中国にある。寛齋の詩より数百年以上も前の、宋代・汪藻の「春日」詩である。「一春略無十日晴、處處浮雲將雨行。野田春水碧于鏡、人影渡傍鷗不驚。桃花嫣然出離笑、似開未開最有情。茅茨煙暝客衣濕、破夢午雞啼一聲。（春の日はほぼ十日も晴れることがなく、そちらこちらに雨雲が浮かんで雨が降りそうだ。田んぼには春水が鏡よりも碧（あお）く輝いていて、渡しの傍らでは人影が水面を横切ろうとしても鷗は驚かない。垣根から顔を出した桃花は嫣然と微笑み、まもなく開花しようとする花は最も春の風情を漂わせる。草ぶき屋根の辺りは煙雨に霞み旅人の着物を濡らし、夢を破るかのように午後の鶏が鳴いた。）」という七言律詩の[四〇]後半頸聯尾聯四句に見える「出籬」「有情」「茅茨」「午雞」が共通する語彙である。寛齋が「過野上習之宅」詩を作るとき、汪藻の詩「春日」が念頭にあったのかもしれない。

「野上習之」とは、前稿の「海老江に游ぶ」の項にて言及した「野上来学」のこと、加賀藩十二代藩主から孝行者として褒美を与えられた人物である。来学は父季長を顕彰することを目的に碑文を立てたが、その碑文の撰文（碑文の文章を作ること）は、前述の大野國寶（拙齋）によって行われ、書（碑文の字を書くこと）と篆額は、書道で名を成した寛齋の長男三亥米莽が担った。碑文は文政三年に成るが、この年は寛齋が江戸で逝去した年に当たる。寛齋が富山を離れてからも、富山藩、のち加賀藩に仕える米莽と野上家との交友が依然続いていたのである。その碑文には、来学のことが次のように記されている。

叟諱徳、字季長、稱徳右衛門、瀧脇為其本姓、野上融圓之無嗣、養以為子、廼冒其姓野上。
…富山藩延聘文儒、以督教其學、前曰華岡先生、後寛斎先生。叟並執贄其門、暇日輒跋渉三十里、來質問經史、傍學作詩。…
長男名來學、字習之、襲父稱徳右衛門、以當戸、次名可得、稱善助、精於算術、出後某氏、次名三餘、稱源藏、好臨池技、受法江戸米莽先生、習之既服農畝、又能用餘力於斯文。孝友之行發於衷、事後母猶母、篤於弟妹、如不知異其自出者。一門之内、雍雍如也。

四〇　清・厲鶚『宋詩紀事』巻三十六。

可謂是父是子矣。

（叟諱徳、字は季長、徳右衛門と稱し、瀧脇は其の本姓為り。野上融圓之れ嗣なく、養い以て子と為す、廼ち其の姓野上を冒す。…富山藩、文儒を延聘し、以て其の學を督教す。前に華岡先生と曰い、後は寛斎先生なり。叟は並其の門に執贄し、暇日には輒ち三十里を跋渉して、來りて經史を質問し、傍にて作詩を學ぶ。…

長男、名は來學、字は習之、父の稱の徳右衛門を襲い、以て戸に當たる。次、可得と名づけ、善助と稱し、算術に精しくして、出でて某氏に後ぐ。次、三餘と名づけ、源藏と稱し、臨池の技を好み、法を江戸の米葬先生に受く。習之　既に農畝に服し、又た能く餘力を斯文に用ゆ。孝友の行は衷より發し、後母に事えること猶お母の如し。弟妹に篤く、其の自出を異にすることを知らざる者の如し。一門の内、雍雍如なり。是の父にて是の子と謂う可きなり。）四一

この碑文は來学の父、季長、すなわち「徳右衛門」を讃えたものであるが、徳右衛門は、富山藩まで足を運んで華岡先生（本田善右衛門）四二や市河寛斎に入門（執贄）し、経史と漢詩を学んでいたと記される。その長男、名は「來學」、字「習之」は、父の名を継いで徳右衛門とも称し、長男として野上家の一切を取り仕切って戸主となった（當戸）。弟の可得（善助）は「算術」に詳しく秀でていたという。おそらく当地で名のある石黒信由などの和算を学んだのであろう。またもう一人の弟「三餘（源藏）」は、「臨池技」すなわち手習いを市河米庵四三（三亥）に師事して学んだのである。この年（文政三年）、米庵は富山藩に仕えていた。來学（習之）は、農耕に精を出していたが、「斯文（漢学）」にも力を注いでいた。孝行や友人との交わりは心から行い、継母には実の母に対するように仕え、弟妹にもやさしく、野上家にあって兄弟姉妹が異腹であることを意識する者などないかのようであった、と記されていることから、來学が戸主を務める野上家の家族が和気藹々としていたことが窺える。

そのような人物であればこそ、寛斎は詩中においても、自分を迎えてくれる「習之」の温かさを梅に託して詠んだのである。

四一　射水市新湊博物館の加治徹様から、野上家の石碑碑文資料のご提供をいただいた。記して感謝を申し上げたい。

四二　坂井誠一・高瀬保編集『富山県の教育史』（思文閣出版、昭和六十年）「第2節　藩校と寺子屋」一〇七頁。

四三　文化八年（一八一一年）に富山藩に仕えたが、文政四年（一八二一年）に家禄三〇〇石をもって加賀藩前田家に仕え、江戸と金沢を往復した。

寛政七年、『寛齋先生遺藁』巻二、二八一頁。

(5) 本陣の主人・桐澤との交わり

富山藩士や儒学者ではないが越中で暮らしていると思われる人物に宛てた詩として、次の「題桐澤生幽居」一首がある。

① 題桐澤生幽居（桐澤生の幽居に題す）

散閑身占水郷中　散閑　身は　占(し)む　水郷の中
日日垂竿蘆荻風　日日　竿を垂る　蘆荻(ろてき)の風
此際養生真得地　此の際(きわ)　生を養うは　真に地を得たり
任他人喚作漁翁　任せん　他人の　喚びて　漁翁と作(な)すに

【現代語訳】

閑で悠々自適なあなたは、水郷をわがものにして、毎日、芦や荻の風に吹かれながら竿を垂れている。こんな時、生を養うのに本当に絶好の地。他人が（あなたを）漁翁と（呼ぶなら）呼ぶに任せましょう。

【解説】

「桐澤生」の生とは、知識人などにつけるある種の敬称で「桐澤さん」などの意。姓のみが記され字(あざな)が記されていないことから、漢学を治めた人物ではないと推測される。この時代、桐澤という姓で寛齋と交友関係にあったと思われる人物は、管見の限りでは富山藩関連の資料には見当たらない。しかし、詩に詠まれた風景などからして、「桐澤生」は、滑川で藩主の本陣を務めた家の主人ではないかと思われる。

本陣とは、江戸時代、街道を往還する大名などの宿泊や休憩に用いられた施設で、滑川の本陣は、代々、桐澤家（綿屋）が担ってきた。滑川の旧町部には海岸にそって北国街道があり、その中心部には、沖田川など幾本もの川が河口近くで合流し中川となっている。「水郷」とは、中川とその支流が張り巡らされた地域を指すであろう。桐澤生は、当時、隠居の身であろうか。毎日、その川に釣り糸を垂れて

いた。それはまるで、漁師のようであるが、こんな生き方こそ生を養うには適している（養生真得地）と讃えたのがこの一首である。

「桐澤生の幽居に題す」という詩題の「題（す）」とは、書き付けるという意味。類似した詩題として、例えば、唐の賈島に「題李凝幽居（李凝の幽居に題す）」[四四]がある。それは、友人の李凝が留守で会えなかったことから、来訪のしるしに壁等に詩を書いて、隠棲の脱俗ぶりや自然に囲まれた野趣あふれる生活をたたえた一首である。「題桐澤生幽居」に戻れば、寛齋が書きつけたという行為からすると、二人は、既知の間柄であろう。或いは寛齋も桐澤家に宿泊したことがあるのかもしれない。当時の滑川は加賀藩治下ではあったが、富山城下からも日帰りができるところであり、往来はあったと思われる。

桐澤家は、天明八年の火事で焼失し、その後、寛政十一年まで本陣としての務めは行われなかったという。詩中の「散閑（閑で悠々自適）」とは、或いはそのことを指すのかもしれない。再建後、文化七年には、富山藩九代藩主前田利幹（淡路守）、大聖寺藩九代藩主前田利之（備後守）が宿泊したところから見ると、本藩だけでなく支藩の人々との交流もあったようである[四五]。また、加賀藩主の参勤交代ルートの中で、滑川が「御中休」の場所であったことが江東区教育委員会所蔵文書の「近藤家文書」[四六]から窺える。

寛政六年、『寛齋先生遺藁』巻二、二八〇頁。

（6）藩士齋藤省卿へ

①　題蒼鷹試擊圖贈齋藤省卿（蒼鷹試擊の圖に題して齋藤省卿に贈る）

天清氣爽北風吹　　天清く　氣爽（さわ）やかに　北風吹く
正是蒼鷹試擊時　　正に是れ　蒼鷹試擊の時

四四　『唐詩紀事』巻四十「閑居少隣並、草径入荒園、鳥宿池辺樹、僧敲月下門、過橋分野色、移石動雲根、暫去還来此、幽期不負言」。
四五　滑川市史編さん委員会編『滑川市史　史料編』（滑川市、一九八二年）、五十頁。
四六　https://www.city.toyama.toyama.jp/etc/muse/tayori/tayori50/tayori50.htm

莫逐小禽穿野草　小禽を逐いて野草を穿つこと莫かれ
眠安枯木最高枝　眠安する枯木の最も高き枝に

【現代語訳】

空は清く爽やかな空気、北風が吹いている。まさに、鷹狩の時だ。だが、小鳥を追いかけ野草を踏みにじらないで。枯れ木の最も高い枝で、（小鳥は）安心して眠っているのだから。

【解説】

「齋藤省卿」の名前は、寛齋が記した「元弘戦死碑」[四七]という一文に見える。「元弘戦死碑」自体は、本来、久米川古戦場跡にあった碑文で、その拓本の一枚を江湖詩社の詩人で高崎藩士の菅伯美（菅谷伯美）が寛齋に贈ったという。「元弘戦死碑」の拓本が当時全部で何枚あったかは知らないが、今日では、その一枚が国指定重要文化財（板碑「元弘三年斎藤盛貞等戦死供養碑」）[四八]となっているようである。

寛齋が記した「元弘戦死碑」によれば、寛齋は、菅伯美から贈られた拓本を見て、省卿の東（主）の事が記されているとして省卿に贈った。寛齋は、拓本の外形的「古質」「雅致」のみならず、その文章から、激烈な義気と白刃を踏むことも辞さぬ勇気を感じたという。一方、受け取った省卿は、それが先祖のことを記した得難いものであるとして、永遠に北地にいたらこの拓本を目にすることはなかったと、江戸での勤務を命じた主君に感謝した。ここから、齋藤省卿とは、新田義貞の鎌倉進撃に従って討死した武士を先祖にもち、寛齋が富山藩に仕えていた時、富山藩士として江戸勤務であった人物と考えられる。

本詩一首からは、寛齋が転職する省卿に「蒼鷹試撃圖」を贈ったこと、またその絵画に詩を記したことを知ることができる。同時に、この寛齋の一連の行為からは、歴史や文物に深い関心を持っていたであろう文人としての側面を見ることができよう。

なお、齋藤省卿とは、『富山藩士由緒書』[四九]に記されている「齊藤（ママ）善右衛門　一信」を指すと思われる。その項には次のように記さ

四七　『寛齋漫稿上』（遊徳園、大正十五年）六十七頁。
四八　国指定など文化財等データベースにある。https://kunishitei.bunka.go.jp/heritage/detail/201/9249
四九　新田二郎編『越中資料集成2　富山藩士由緒書』（桂書房、昭和六三年）八二一頁。

れている。

寛政三年三月、御腰物奉行被　仰付候、同七年十一月、寛隆院様御代、役人組表御目付被　仰出候、同十一年三月、御参勤之御供、御道中御関札相勤申候、江戸表二おゐて、御作事所兼帯被　仰付候　同十二年、御帰城之節、御道中会所兼而、相勤候様被　仰付候、同年八月、御留守居添役被　仰出候、同月、江戸表江出府仕候。

寛政三年から十二年までの間、「御腰物奉行」として寛隆院（前田利謙）の側に仕え、参勤交代の折に江戸に出向いたのであろう。寛政十一年には、「御道中御関札」の役も与えられたところから書にも優れていた人物であったのかもしれない。また、後に江戸にて御作事所（建築関連）の任も担当し、十二年には「御留守居添役（おんるすいそえやく）」となり、富山藩江戸藩邸において外交等も差配する人物となったと思われる。

「蒼鷹」とは、羽毛が青色を帯びている鷹のことをいう。

寛政五年、『寛齋先生遺藁』巻二、二八〇頁。

(7) まとめ

以上、寛齋の富山での交流について、その詩から次のようなことが窺えた。まず、富山藩村家老から極めて厚いもてなしを受けたことである。また、後に寛齋同様に広徳館祭酒となる大野拙齋（國寶）との親交は極めて深く、その能力を高く評価していたゆえにか、共に一宿してまでも語り合う仲であったということである。

更に、本稿で取り上げた詩からは、交流の実態のみならず、登場する人々の性格や志向も伝わる。例えば、村家老は「客好き」で「豪放」、大野拙齋（國寶）は「学問好き」、克卿は「極めてまじめ」、野上習之は「温かな」人柄、桐澤氏は「悠々自適を好む」等である。これらの人物評は、本稿で指摘したように、寛齋詩以外の資料にも類似の記載があるものもあり、寛齋のバランスの取れた識人力をも窺うことができよう。

小論は、令和五年度科学研究費補助金基盤研究（c）「江戸明治期漢文笑話集の訳読と研究―江戸後期から明治初期の漢文笑話集を中心に―」（研究課題番号18k00313、代表・磯部祐子）の研究成果の一部である。